

水經注

三



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



短歌部六

冬

山居初冬

天野政徳編

寛光



けさつゝれぢもあよあまとまされ多やせちまうこととくのやいと
名所初冬

より

けさつゝれきさあくわらまつれくのこやよあれたつまよーんまし

初冬時雨

八種

ちにあとせりしきれうれわんばとあれよゆかーくれば
初冬月

寛光

うはれ月のかけまへさえややまにいふだうまよーんまし

十月之衣

寛光

ひづれかたみとねやまん月代よし

時雨

東宮

けまみれも夜にみぞとちかやうよのねまやーくれをまん

春登

タマリモメアモモタカツカシムナヤオカバヒトノレトマ

曉時雨

夷廢

タガサヘネルアーレル歌だまくとまつたてすうじル

より

スルル月夜をまたがけてわてる歌トロトロトロクル

石井

シヒルマハ風よこはまの音ミタマハーレトナリあかつたれを

春庭

ヤドウケルねやと夜半に月をみてるやと歌をたさすくれひま

定保

まめどとちかうかにきて歌をせりはとくと歌に月のひくわ

吉齋

総義

山からみ軒をとしきてゆくとやなとおとおとおとおとおと

春木

レムドガムムア月采れとんわとつれてゆくとおとおとおと

勝

世とほととおとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

高麗

かみくわーれよとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

葛民

生とれをれひとおとおとおとおとおとおとおとおとおと

たかす

だよまくと月代りとくーうたかーよハくればとおとおと

峯時雨

後漢

もれぐれとくらべやかなのひ
ハラタヒシ

與叔

ひくはくちかとくわくせんはれよくちか
落行

卷之三

とくさん字門の間でまことに地獄の
日暮れ一氣
春門

卷八

晴時雨
ふ川

卷之三

と見
ま沙時翁

卷之三

桂時雨
常久

九

五
七
八
九

李
元
亨

御内侍
長政

卷之三

御書院
御書院

九
九

たまちかくしやくわくわく
すすめ

- 11 -

カニハナカニハナシ名ハ軒門ノ事也

久哉

卷之三

寬
卷

草堂集六十

完早

秋は今一実れぬすまほハ弓の矢をとてアリテアリモち葉
有政

すまばくまちもぢりよのねくをまかん

惟重

あひやの火口へまくらをかへ

乃充

かぢやのれはよにゆめとせまわせ
かやにあふるみをも

失節者
妻夫

卷之三

おもてやまのあそびをやめにかくねん

春登

元が有事
春海

春
はすとれ風のトトロヤヒキシテトモトコトナリトミモ

有余有余
克廢

風に吹かれては立たぬ

三承寛
ふる葉入巻中

山家集

人をもれに見ゆよおなれとよんせう
アユメヤヌル

卷之三

まくはりよ人かわいこ柴火とてうてむかはりよ本の木

山陰義
子川

用兵無常
一

山家
山家
山家

川底糸

時内良

にそはれをあふかくまにやちよせぬれ本か

み工底糸

春門

ねうらうす年たむぢ一枝代季すりては後水まん中川

底糸はあ

春齋

も上れえよのとみやちよやんれ水代年にうかゆ

周底糸

セ英

アヨリ代をひのトみうそこうはれやたひゆくへれぬまとらん

底糸混雨

倉持

モモシロウコロミタケルノリルカモハシテシテシテシテ

貞暉

光敏

シキミトキナガムシトマサヒテシテシテシテシテシテ

月あがくよ本代

子安

子川

もあれうふ事うどとくう川代河ろれ車よきてけんかな

安船

孙サ自あらかまよかたうとくう

時内良

おは山みね代あーーんちようじてトミウシタヒトモ代行う

残糸

一道

うういぬるにかーーて三九かうすまた代代ーーくれ

吉虎

村か代あそれのよーーとお代代代西代のこれのたぐれ代代代

政德

景け代代代とみすすかきかきかきかきかきかきかきか

卷之四

子川

新夜半後

とまくせん修業かめいがたゆみとよの本代松川にそ見く

卷之三

志

卷

卷之三

山川永

典清

其のレモンの花の匂いが、春登の香りをもつてゐる。

卷之三

103

وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ
وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ

卷之三

1

卷之三

卷之二

卷之三

桂府

七
九

11

元 13

卷之二

八
平

ねくめらみ

七

正德

1

主子書

太平

むき一ノヤイタツヒトニヒトトマハシタヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

嘉慶

今ミキハ一ノヤイタツヒトニヒトトマハシタヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

被ひたシテガトニシタヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

興清

トトヨハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリ

秋光

トトヨハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリ

冬光

トトヨハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリ

春光

トトヨハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリハリ

夏光

千鳥

ちとやぢく、このまゝおひこさん

正義

蒙古文書

補足

後此の事はまづやせやと云ひて有り

卷之三

通顯

ひらけのほれもやまかせ

卷之三

日暮に山かせに坐ちとね
くわ

卷之三

—

曉子集
武秋

卷之三

東舟之子也。丁巳之歲，風流文采，已成其名。

桂伯子考

おひがいに

卷之三

の床丸

佛子系
原相

卷之三

信德

李齊

うきよれだらまくわくもやもくとハニセとちくやふとくちとく

水鳥

秋浦良

時玉代とくにれはれすくわくとくまれまくもとくられまく

つやす

うたまくせ次代古瓶もくれてよとくとくのじかくやくわくし

他多喜

興清

こやかや一床にハメトあそねるやひきとくねすりケバあそぶ

吉齋

地代多くせしーつとくおすくまーつやうくとくとく

重固

とくねくらうなれおもむくとくとくとくとくとくとくとくとく

霰

子リ

ウタとくあくとくはくのとくがれにとくとくとくとくとくとく

寛

京寛

うまくひくのあくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

宣風

てくまんちとくがねうちとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

秋浦良

てくまんちとくがねうちとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

常久

うまくれとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

京寛

うまくれとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

長英

うまくれとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

十日うちちかく書かわされ
詠頬

詠す自らかまひのまへとれにまつるうみゆやーお
空

えればくドハシカあせんばやくしーおれゆだもられ
宣保

玉たれまゆひめにせかわくわいへうかうなはーの紀
應章

枝まぬま木代ゆきの花をわきわにせよわーとせん
安す

詮方

とそれからくうれー夜せんつれゆきけおー書
雪の音才オ

興清

ゆれも竹のねくとつまれてゆきがさにまくまくかま
かきくくほくよのゆたくれてあいれすと月なはだりにま
千の音才オ

徳用

かたもく越れだひくうせよゆだく風にくさればー
豪麿

風とゆ行との竹れ下とれよまくのむれアマムムム
ね上雪

長温

ほれとくけのて見れとおれまくゆくとくとくとくとく
空盡

世とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
空れ本にほくやだふと

走麿

かづつと本とゆれがくわれハシトおはれとおはれとおは
雪滿群山

貴良

こしれ名とくがーとおとづれのうなとらまくはーてこゆれ
山空

興清

うつまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
をゆる

三日月のちやんとさくらんへさくはひたつせうすきはま

うれしよがわか

承

さかひたつのまほとくらむてうれしおそだひゆ

山あす

手門

うれしあわとくとおもむきまほはちくわがれやま

山あす

宣風

うれしにこすかくくらむとまくわやめのせひとまく

毛坂

あとまゆりのくわくとくらむとまくわやまくわい

季勢

おちがえりのせとたててさくはひよくわくと

寛光

うれしあわせすきてくわくとくわくとくわく

絆子

うれしれー秋れかくの月れすゆたけまくわやまくと

用房

亮早

舟すくあうねかだかはれきみととくわくわくーおれーたく

信者

信者

いがくとけさむてうんぐれおもむくわくとくわくのじ

秀中

直利

うれしとひがくとくーおれすくわくとくわくとくわく

春庵

うれしとひがくとくーおれすくわくとくわくとくわく

時方

推重

うれしとひがくとくーおれすくわくとくわくとくわく

さくせ

さくせ

妙貞

おにて下るよとハレとちのむれつてまことまことにあやふまを

安す

摩子

吉磨

みだかうひさくがせんたうされとよのほかやちかつたよし
あらゆれなかゆくへとまくまのきじまくとゆめりかく人
女のあいをほゑたまかまくわいとつとふととと玉枕
かかげてよめ。

寛光

炭竈

もむすにうんさう一木ハにみがまのけすかにのこせとれのやまつ

松浦良

はるかづくもゆまかまくけすかやまにたまひよしん

松浦良

ひちのむりすけすか一やまねまんくいかまくとほりて家とくさん

炉火

松浦良

内とととととととととととととととととととととととととと

行幸用詔

東寛

ふくよめれいじめんとてかたよあととれととととととととと

炉火仙春

春門

うつむしけあたわせまにとれをとくにとくにとくにとくに

熾火

興情

燒にてととととととととととととととととととととと

沐浴

寛光

ひざとてひとよらまくらうほにかのくわくとくわはくとく

徳風

中居や中居をもて来やんとつ今本丸とまよ川

同古神乐

卷

殊人也。是不以爲子也。是不以爲子也。

本草綱目

卷之三

春雄

卷之三

۱۲

海風は急よひあれば、あれまでのとどけに遙かと
といひけりて、まかれとくにやふ 宽光

とひりけんてまかくと
みゆゑ 宽光

實業

うれしからぬかと思ふ

卷之四

三

人代とすやとくはう様子をせんにせられ
てのちくわんで

卷之二

おひきあれぬを

モウヤエ

卷之三

子林
系寬

卷之三

卷八

花道樂
立春

秀雄

卷五

雪与年深
常之

R

四

日光の紅葉が見事でござる。又、

卷之三

承

うちあまむもんに有りてゆきと
横山也とおおむね

送年華硯中

序行

とくらみかへりや此は凡てを人と見てはもつてはれどもす
家書
吉磨

宋書

古齋

「おまかせだよ。おまかせだよ。」
安さ

卷之三

宣風

宣風

卷之六

卷之二

是屋

卷之三

卷之三

4

原相

原相

454

志
け
く

李齊寧

李齊寧

宣風

宣風

希宗著
妙悟良

妙法良

原相
侯崇暮

原相

浦家書

まちかくのうかねからむせかひやまくわせよめが

宋書

言行

卷之三

卷之三

卷之三

卷之四
一
備資
御考補綴

子不外也

寬光

おもてのれやく
通願

— سے ملے تھے

卷之三

居士
其行
清世風為才也

60

知道

卷之三

一念之保

ト無力で、うつむきのまゝ

おひたせやをひきみゆき
おまかせや

卷之三

杜河良

卷之三
冬天象
物候

卷之三

文
化
記

秀穎也
袁廣

賓先

卷之三

見とちやかはすとひもて業はるのけよふれあらとみせり
信光の春 常久

かへわみよがよおとたて花火にうかくおとすとすとけかうす
子節 日曉

年竹れねやひみよたす自めけにかき一れだやひかよそし
冬道 與清

弦弓ねむみゆきつひ一弓をひくわかすにいまつみゆくわ
毛本 政德

くれていり秋のかたすのまをせてふゆはこす集にめらすやキ仰
毛風 寛光

玉あさーとて死比て死比て死比て死比て死比て死比て死比
毛山 惟我

丹波源ハミ吉アーニカムシムねじかくろとくとぞかれ
毛默 美素

みくに山ひもひもひもひもひもひもひもひもひもひも
毛久

山根名代あーととととととととととととととととととと
毛夜 宜保

トトさやく井代ひもひもひもひもひもひもひもひもひも
毛夜

トトさやく井代ひもひもひもひもひもひもひもひもひも
毛夜

山根名代あーととととととととととととととととととと
毛夜

トトさやく井代ひもひもひもひもひもひもひもひもひも
毛夜

東人水鳥あれおにとよよーとよーれりをつみそくでけり

草彌集卷第七終

草彌集卷第八

短歌 郡七

志川やうすきす

興清

天野政徳編

にましのにあふたまたかまへありたてとむれぬまと人ハみまじん
とれまよこいとハりしなねぬすうてくろと人にひくへとおハ
いかうへてかまかやあくへになとほとがくとくくくくくくくくくく
あくまくまかまかやあくめつてとせたつめハちみだかわゆけ

徳風

アレをまにたえむとすとて玉代とおのせかたやうのひくいぢくい

信美

あくまくまかよはかよとやのみにとあふせかたさにゆくとてか

之直

天はれ
神あやかに
天とあふる
いからまき

初集

まひごろもすみゆきの神代まうれそもくろりやまくけん

ほんとうにかわいいとおもふ

長英

信德

おまちなれにすみとおがきをめ

けよのれにゆきひくわねやのまくとくまくはすて
おもて

卷之三

不云出魚
尚絅

思不言矣
在雄

アツヤシマの池はひどく
かわい

かくやみをかへてまよひとゆめわよみかねて

欲言有言
言行

不
好

恩怨
二三事

立
錄
卷
一

草堂集

忠派集

盈子

うはまがやかせんれいをみたてしゆへひらめくや
杜風

卷四

樂思魚
完早

四
三

四
通

卷之三

卷之二

其の外に、その他の事は、

七
四

おまかせとゆきよかくさんじゆくわくさん

卷之三

たまれぬみはいからむか猫ねよとくねあつまもん

長英

卷之二

卷

尋名
寬光

卷之三

三

هذا هو سعر الماء
لـ ١٠ كيلو

明儀

通文苑

上
かたよ
すみやかにあらわす
かくはん

卷之三

卷之三

考略

青い煙ばかりや

文獻

京寬

今更ハモレタシテアリトナカニ
春雄

卷之三

清秀觀世音大師堂上

卷之三

かくとあわせ、それで、ハルヒーの、おもむかづからずは
の、おもむかづからずは

卷之三

新嘉慶元年
壯溪良

卷之三

かくはれど、ばか一ひとかずかせハ
まほらまほら、ややこひなたかん

卷之三

新編　卷之三

卷之二

第三十一章
完早

卷之二

たまに見ゆるのあやかやむらにかかる、それ

卷之三

トモヒサシヤマホ
貞氏

卷之三

はらまくとせんじのまゝつあめくわすかうにぬけん
争姫

せんじのまゝつあめくわすかうにぬけん
津留良

あをくねくねうろをかへる年をかくす年をかくす年
寛光

くまくらかひかへとだのせんぢたるのうゑくわすか
獸姫

くまくらかひかへとだのせんぢたるのうゑくわすか
寛光

あをくねくねうろをかへる年をかくす年をかくす年
景寛

あをくねくねうろをかへる年をかくす年をかくす年
景寛

かくすかくすかくすかくすかくすかくすかくすかくす
幸姫

かゝれとみだりもとまつて風すくわゆくさくがにばりと
待室矣

寛光

月すうと人へひしり われをかみよせむれつゆれひみの

雅朝

ひれまはさわとれとねたのすと待よすけゆくひめうとれ

完早

月すうとまつてとまつてやまびくへまくとまつてあけにけいを

毎夕結矣

夷齊

おれおれも夕とまつて雨れすまよそたのめとはかわくへやにを

宣風

さかづのくみやじかくとまつておとたんじみかくめぐれすを

明儀

かぢくひとちむかねむかねとまつておとまつておとまつておとまつて

秋海食

詠室矣

こゑのくみあたはるまつしにかみれとまつてまつあかせとれ

後流

あめがくらまつてかれといばやをもいれとまつてかへー神やへさとん

信德

ひひみくはらむとまつてとまつてとまつてとまつてとまつてとまつて

季雄

ゑれがくらまつてかむれとまつてとまつてとまつてとまつて

興清

あまくはらまつてかむれとまつてとまつてとまつてとまつて

季亨

あまくはらまつてかむれとまつてとまつてとまつてとまつて

せぬ

あまくはらまつてかむれとまつてとまつてとまつてとまつて

傷物遺哀

嘉唐

とせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせう

別無

春庭

おのれ日れゆふやかたくれてかづくまつてそてはまかれぢ

老齋

おれいとんやーんと清うたてよみうさかひを

京寛

とみちをすねるまかれてちやくすわあ風ひへかづだよ

高麗

ちえはすきうまくに在れやこかれかたまくちから

大平

おれいとんやーんと清うたてよみうさかひを

通顯

おれいとんやーんと清うたてよみうさかひを

明儀

深夜の意

一叶すれもへまれとやんがむすにあうやうじてかづくまかは
女めよとくちやんれかねむだす

秋海良

かねれおとくねひましよまよとくそれりかつむとまつまくわ

後高齋

おねがみうまくにみたれてかづくまくとくとくとくとく

信徳

ほきあはねむれどくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

仲舒

おれいとんやーんと清うたてよみうさかひを

切走

よせきてよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

後続

おれいとんやーんと清うたてよみうさかひを

左名無

秋海良

やまくら

厚

ひそかにやまの本れまくはなすれどハシメと
子世

顯

孝廢

いはかほくとちせんきよめくせにうれけ

吉固

ひてまかくろねうみに一に本りてたまよのうひに

安

やまめだめとせがよとせがよとせがよとせがよ

就吉

れらむにハタレしやんにちよみくよがくわくく

喜

移

いつほじうとせとせとせとせとせとせ

久矣

信德

斧れそみくとたまくとまくとまくとまくとまく

久矣

人ふくかくちとまくとまくとまくとまくとまく

常久

みのよかくまくとまくとまくとまくとまくとまく

之直

さりくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

安

へたくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

橘

又人にはめづらしがあるまいが、おまえはよからぬやうだ

序

大抵以爲子雲之賦，其辭藻富麗，想像奇絕，誠可謂良工妙匠矣。

宣
正

是れは風と云ひかねばならぬ

承

葛氏

暮田
義之

ハカタシテスル事ノ如クニヤ、シテナリ。

根
志
政
廣

そぞれ時かのうりをもとめらるゝに自れ

義隆

トモヒヤウカシマハシマニシテ、
トモヒヤウカシマハシマニシテ、

心才恨矣
志也

大作也。此中人多是也。其後有事。不復見。

君の心はかくも
我を思ふはつまむと
おもふ

王之保

うそだ
悪風

德

故鄉如此
春門

卷一

れひでひかくらゆめのいふたへとえ

伊豆守とひよと新之助
玄保

おれは小松川の川をかづく
うねりあらわせ

あひれよ

李齊

君とおひつてやせぬせめい川のわせやたちてふかく

京寛

陶夜ゑ

春門

陽一教ゑ

興清

かたやーすとうまくこめはしつぶかくよどよど

長英

ひこうてんむ

寛光

ゆきとひよのたまひにまかせかみかみへせかみ

兵陣女

千鶴

思魚

子川

くわづのまにかへりよちゆくじゆれせよへうわく

貴良

れをねりはあらはあらはあらはあらはあらはあらは

思貴女

れをへるまにまにまにまにまにまにまにまにまに

老齋

れをへるまにまにまにまにまにまにまにまにまに

被妨人魚

明儀

志学回憶

子川

りゆくよしゆくよしゆくよしゆくよしゆくよしゆく

寛光

りゆくよしゆくよしゆくよしゆくよしゆくよしゆく

卷之二

長沙

我变矣
世亦变矣

卷之三

すまよかなものひからせんせん
くわんくわんとおもてあけゆ

时局

多
少
不
同
也
不
可
以
說
是
一
樣
的

采

寬光

徳風
恨波無

德風

寬光

おふかあくまくとてまくちやねんがたみにれど

10

女にやまゆりをあたへてやう。啓行

15

人無也哉
老齋

中
川

人比素れぬに はなづかひのまへと
137
寛光

寬光

やけもくはあらむよのひ
朝女守地人

東北の事は、さういふ人へ聞かれて
立派

卷之二

あはまかぬればやむにゆきとせひみゆく
かづくやれやむ
久我

之哉

おそれ申すが如きはござりや
事無れども

れ
つ
よ

うつにせよいかねどもひてよがまちやー着せよとく

着にきくたる

画風

もじゆてあれやけれまわのがやねれまわらとれどもや

あけす

春意

せしやれいはじめどのまの月掛からひらひよだるを

おけす

へじよけの小舟トモヒタとちにあふれてソナリカニ

まよ

まじかやとくさんかややおれ下トスルマサヒムカレ

秋意

み川

せとひかく小舟をばらばらとくにひかれんむきとく

義樹

あひよとくかよのせよひく、せひよせよひく

言行

船をよしとみの舟をよかくとといつかーれん

秋意

せ月れ車とたかーとハねてやく、くまうととソリ

春意

ハシとくかひよだりばりやくに船を月をくちかつてにす

喜雄

うづくせひりくひ袖にまくおれみよとれちみハたぢれ

春登

おれにまくの風とまいたれれてくらかたーをみてやむ

仲舒

かたくわあればーくまればよハ引くやすにまくえまくわ

春意

せよくわよくわよくわよくわよくわよくわよくわよく

春意

おととハ人れ^{アシテ}にあすか
おひる^{アシテ}にあすか

卷之三

己亥

卷之三

やひよとまくばれり
吉田をかわしゆく

あひゆかくわむた。小草花のうへひづく。

ひたるはとてあらゆる事とあれども

譜
系

窮窪鳴魚語
又川

かくはうひたてをせんじゆす

女北客南歸人未歸

卷之三

うそひにハひてよ
とまかづくよすくわ
わやかくわせ

蟹

男女舟ノ事ニシテ
原

おかゆとおゆとも
たま車北ひまほの袖とそよぐてま

明儀

かくしておまへやおれをやがておとせられまいかよ

山野れいもぬりうららかにわくわくと
おもろめやまとんじれか

男は元氣だつてかくちがひなかつて　夷曆
今少くすゑにまづや風ハたれどもまづのへせん

壬午年秋月
寛光

たが、たゞやく人にはおとづれつかれて、かじをくじてゐる身とはちがふだ

之也。故其子曰：「吾父之子，則我之子也。」

わざひけもあれども、かたづけておる

此早
事

目次
· · · · ·

神に了りまつたがゆきよしめ自分ナ

かたもあくればよしとおもふ
かわらかにあらわす

亨自祐烹
直利

ハサトハナムケノコ
ハサトハナムケノコ

東風急
春歸心
已盡
空留聲

印第安人

君
君

東坡全集

常久
言葉立

春
七

卷之三

かのうにえおれひれきすかはまくわくとくらむきめく

高純

これぞおれむねにあたえやうあらうとまつりたる

春門

ひづわれせわからんよ御おのまかすとくと

光敏

トらむちよつし深れむくれだれとれおひよくとく

寛光

おおこゆにかまとかくわうねくみやまにうめが下り

狂良

それまひうれしゆにすきばすくいかくく代みゆん

喜山彦

いがくまれおひでりしおれくさぶよてんそくとく

苦子

おとおれにみてよれりしよがれすのれもよやまく

子川

かうつかやまちにまたやうせきくはつきくのをせよ

毛崇

あくとく今しつれぞれぞれぞれぞれぞれぞれぞれ

意光

またおとせしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

意清

あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

意清根

くハカクとくとくとくとくとくとくとくとくとく

意子

トシトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトトト

意風

明儀

一月日よりやれねしき一筋すすむとくとく

喜天京

寛光

さかへりよしの風せきとくとくとくとくとくとく

喜天京

いふ子

さかへりよしの風せきとくとくとくとくとくとく

喜天京

元光

おれのじろとやまゆかうそくへにのひとくとくとく

喜秋田京

明儀

かちんとちかやーとくとくとくとくとくとくとくとく

喜天京

茂周

ちよめもつわにひとくとくとくとくとくとくとくとく

喜天京

勇雄

秋月月にちせりをかひてかひてかひてかひてかひて

喜天京

宣保

かくーとちややれんあくまくとくとくとくとくとく

喜天京

良行

みしろはとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

喜天京

あや子

くらう根をくられにいとくかくとくとくとくとくとく

喜天京

あけ子

あくとハ強てちだまみとくとくとくとくとくとくとく

喜天京

宣同

うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

喜天京

政清

ほれ下に一とひてすれあつま川河トモやーらかみ

喜天京

吉子

がしてまにすれあつま川河トモやーらかみとハ

吉子

ちよつとれどもといひてはまづかのすみゆゑにわかつて

寒山をゑ

せしす

よそやれとおへゑにす。やまとてまくらがよそへなにかくさん

寒鶯ゑ

よ川

ねにちよみてうそくはまくたまむれ行ふのうばせりひだつや

寒鶯ゑ

京寛

だあくれ算とひかへてまくらがよそへかよとちくあす

寒鶯ゑ

寛長

つれとぞとくとくのれ秋風にわきひーとれゆとれゆ

寒馬ゑ

有信

あゝ弱れちくうす葉ひかまリとくまれて日々ふる身は

寒鶯ゑ

より

サトヒトモひれつすのかがれねは方ひくねにそちかく

寒虫ゑ

春夜

さうすやうひはりとまかせよとくタれれまつむ一叶

太平

さうかくとくとくのれ花園とまくらとくとくとくとくとく

寒鶯ゑ

吉徳

さうひまくあらとあらとれぬとくとくとくとくとくとくとく

葛民

らくかれていつとむとひまくとあらとれとほとよ

寒鶯ゑ

太平

さうひまくわくわくとまくらとまくらとまくらとまくら

寒文ゑ

興清

さうひまくわくわくとまくらとまくらとまくらとまくら

モ英

さうひまくわくわくとまくらとまくらとまくらとまくら

寒鶯ゑ

總義

走れとよれたよとおもひかへねづへとよにとよくよか

まきふゑ

宣風

えふにおまやみたと玉やはるにつよきてをよしわ

まきトゑ

まき曇

えとおだやくよとよにけよろよひあすがりれ

まき花ゑ

大平

一衣ゆ一衣小苦れほがすうかくもよちかねねうすがうれ

まき笛ゑ

まき曇

まえ行れおのづか一かゆけくくひじかねとくまく

まき鞠ゑ

長収

えれにかくむつておそれあやとりだけとうすくまく

まき室ゑ

一けよ

ひくあみの日ひあきやむたみだむくとくをめぐらし

まき見ゑ

一けよ

かくひれおひくみてこすれむれあとほぢみれくま

まきちゑ

あは

なづおくれまうひおもひくいふくもくとくをく

まき

一けよ

まくまくおれおれまくまく一様うゆくはかよけせれまかく

まき箭ゑ

子川

まくまくおれおれまくまく一様うゆくはかよけせれまかく

まき箭ゑ

子川

まくまくおれおれまくまく一様うゆくはかよけせれまかく

まき箭ゑ

子川

せよとちやかうきのちやかでせじやとねくたつに多用

秀吉

うとれとたむかげとまつわせたれをちだすやども

秀良

あくねみわははれうてまわせたれをやかくまし

秀虎

まくねみわははれうてまわせたれをやかくまし

秀虎

あひおとよにちれをもあひされあひされをやかくまし

久義

ゆれよやくわせとせよかへてまわせたれをやかくまし

秀保

まくねみわははれうてまわせたれをやかくまし

宣風

まくねみわははれうてまわせたれをやかくまし

信子

かたよのひはりまよめとまよめとまよめとまよめ

春門

まくねみわははれうてまわせたれをやかくまし

寛光

ねだよめとまよめとまよめとまよめとまよめとまよめ

完早

まくねみわははれうてまわせたれをやかくまし



